

最近のノーベル経済学賞について：二〇一〇～一八年受賞業績を中心に

著者	平山 朝治
雑誌名	歴史文化研究
巻	6
ページ	87-103
発行年	2019-07
URL	http://hdl.handle.net/2241/00157073

最近のノーベル経済学賞について

—二〇二二—二一—一八年受賞業績を中心に

平山 朝治

近年のノーベル経済学賞について検討することが、著者に与えられた課題である。

さまざまな領域に対してノーベル経済学賞が与えられるが、専門分化の著しい現代の経済学において、それらの全てについて専門家として十分に理解した上で論評することは、おそらく誰にもできないであろう。そのため、私自身の関心や限られた知識をもとに、二〇二二年以降のノーベル経済学賞を時系列にそってみてゆき、必要に応じてそれ以前のノーベル経済学賞についても言及することにした。無理やり一つのストーリーのなかに個々の業績を位置づけたり、全体をまとめたりはしないことにする。ただし、まとめるとすれば、二〇一四年に受賞したティロールを末尾に位置づけるのがよいように思われることは付言しておきたい。

二〇二二年

この年のノーベル経済学賞 (The Sveriges Riksbank Prize in Economic Sciences in Memory of Alfred Nobel for 2022)^① は、アルヴィン・ロス (アメリカ合衆国) とロイド・シャープレイ (アメリカ合衆国) の二人に、「安定的配分の理論とマーケット・デザインの実践にちなんで」^② 与えられた。

本年の賞は中心的な経済問題に関連する。すなわち、異なる行為者 (different agents) たちを可能な限りよりよく縁組みさせる (match) にはどうしたらよいか、という問題である。たとえば、学生と学校との縁組み、人体の器官のドナーと移植を必要とする患者との縁組みはどのようになされるべきか？ このよう

な縁組みはどうすれば可能な限り効率的に実施されるのだろうか？ どのグループにはどのような方法が有益だろうか？ 賞は、これらの問いに対して安定的配分の抽象的な理論からはじまり、市場制度の実践的な設計に到る旅において答えた二人の学者に報いる。

ロイド・シャーププレイは、異なる縁組みの方法を研究比較するために、いわゆる協力ゲーム理論を使つた。二人の行為者のいずれも、お互いに現在の相手よりもっと好ましいような相方を見出せないという意味で縁組みが安定的であることを保証することが、鍵となる結論である。シャーププレイと彼の同僚は特定の方法を導出した。なかでも重要なものは、ゲール・シャープレイ・アルゴリズムと呼ばれるものであり、それは常に安定的な縁組みを保証する。これらの方法は縁組みの過程を操作しようという行為者の動機をも制限する。シャーププレイは、縁組み方法の特定の設計がどのように市場における一方あるいは他方の側に体系的に利益を与えるかを示すことに成功した。

アルヴィン・ロスは、シャーププレイの理論的な結論が実際の重要な諸市場の機能を明らかにしうることを認識した。一連の実証研究において、ロスと彼の同僚たちは、特定の市場制度の成功を理解するための鍵と

なるのは安定性であることを証拠立てた。彼はのちに体系的な実験室での実験においてこの結論を実証することができた。彼はまた、研修医と病院、学生と学校や、臓器ドナーと患者の縁組みのための現存する制度の再設計を助けた。これらの改革はすべてゲール・シャープレイ・アルゴリズムを基礎とし、別払い (side payments) の禁止など、特定の状況や倫理的制約を考慮した修正を伴うものである。

この二人の研究者は相互に独立に仕事をしたにもかかわらず、シャーププレイの基礎理論とロスの実証研究、実験や実践的設計は研究の豊饒な領域を生み出し、多くの市場のパフォーマンスを改善してきた。本年の賞は経済工学の顕著な例のひとつに報いるものである。(同)

matchingを縁組みと訳したのは、この領域が扱う問題をゲールとシャーププレイは「安定結婚問題 (Stable marriage problem)」と名付け、一般にこの問題の入門的な解説において、同数の男女からなる二つのグループからそれぞれ一人づつを選んでマッチングするような、性比一対一の異性間単婚問題が扱われることに因んでいる。

教育における学生と学校や、医療における臓器のドナー

と患者の関係と結婚とを同じ理論的な枠組で扱うことに対しては、私を含めて少なからぬ人々は違和感を抱くのではないかと思われる。

教育はサービス産業の一種であり、学生は需要者、学校は供給者であり、入学金を多く払う意思のある受験者の合格基準点を下げるといふ別払いは、日本では昔から一部の私立大学医学部で行われ、学校経営を財政的にも支えてきた。公立学校に比べて私立学校の学費が高いことも別払いの一種であろう。したがって、別払いを排除する安定結婚問題では扱えないような学生と学校のマッチングは少ない。臓器は倫理的理由から売買が厳禁されることが一般的であるが、違法、あるいは国によっては合法的な臓器の商品化・売買が行われている。しかし、別払い禁止という、貨幣と交換可能な商品化に制限を課すことが望ましいという倫理的価値が標準的な安定結婚問題の前提となっていない。

現実には、男女の結婚においても相手の持参金、収入や資産の多寡が問題にされる際にはやはり別払いが存在するとみなければならぬが、他方で、理想的な友情、恋愛や結婚は財や貨幣やサービスの交換とは別次元のものだという考え方も存在し、近代西洋において理想とされるロマンティッククラブはそのような異性間単婚主義である。

標準的な安定結婚問題は、別払いを排除した異性間単婚主義のある側面を抽象化したものであると言える面はある。しかし、予め決められた男女それぞれからなる二つの集合に関して、男性は女性に対して、女性は男性に対して不変の選好順位を持ち、男性は今まで求婚を断られたことのない女性のなかで最も順位の高い人に求婚し、女性は求婚してきた男性のなかで最も順位の高い人をキープ（女性の側から取消可能な婚約を）するという集団縁組みを、求婚する男性がいなくなるまで繰り返すというゲール・シャープレイ・アルゴリズムは、ロマンティッククラブとは大きく異なる。恋愛は特定の相手（在原業平の初恋のように姉妹ということもありえる）に対して他とは異なる特別な思いを抱くことで、異性の集合に属する人々に付与している選好順位が高いということでは必ずしもなく、当初は敬遠していた人を好きになる、あるいは本当は好きだと気付くということがある。アイドルグループのファンによるメンバーに対する評価でも一推し、二推し……とう順位付けのほかに、それとは別格の神推しが区別されることがあり、その場合神推しではない一推しは他のメンバーと変わる可能性があるという意味でも相対的な順位とファン自身によって意識されているようであり、一般的にも恋愛感情など特別な思いがない場合同一人が持つて³いる選好順位は

かなり不安定だろう。また、異性集合は、集団見合いを繰り返す間成員が固定されているような安定的なものではなく、新たに転入して来たり、死亡、卒業や転出で去って行く人がいるのが普通であり、転校生に惹かれたり、卒業を機に思いが募って告白したりということも少なくない。

親友や恋人など、全人格的に交わる相手となるような人との関係は、その人の人生のストーリーにとって重要なきっかけとなる出会いによって始まるのが普通である。一目惚れに限らず、以前から周知の間柄であっても、偶然のきっかけによって新たに相手の思いがけない側面に触れたり相手のことを強く意識し、特別な愛情を抱くようになることが多い。

マックス・ウェーバーによれば、「完全な恋愛共同態のばあいには、お互いにとつて不可思議な定めによって、つまり、語の最高の意味における運命によって形づくられ、そして、それによって『正当性をあたえられている』……とつねに考える」⁽⁴⁾が、安定結婚問題はそのような出会いを排除するように定式化されており、ゲール・シャープレイ・アルゴリズムは、別払いの金銭を伴わないとしても、恋愛に基づく結婚ではなく売春の一種だという印象を与えるものである。それは、自分の選好・欲求をよりよく満たすための手段としてしか他者を見ておらず、「君自身の人格

ならばに他のすべての人の人格に例外なく存するところの人間性を、いつまでもまたいかなる場合にも同時に目的として使用し決して単なる手段として使用してはならない」というカントの有名な定言命法を参照すれば、安定結婚問題は相手の人間性を手段としてしかとらえず、目的としては用いていないことになるからであろう。あるいは、バーバー⁽⁵⁾によれば、そこで問題となつている関係は「われーなんじ」ではなく「われーそれ」だということになる。

相手の家柄に基づく順位や、収入資産に基づく順位や、理想のタイプに照らした順位と、実際に好きになるかどうかということとは、必ずしも一致せず、ロマンティックラブは、他の評価基準よりも実際に好きになったかどうかを優先し、好きになった人同士の恋愛と結婚とを理想とすることで、評価基準の多元性や葛藤を解決している。純粋な友情に基づく親友関係も同様だろう。

恋愛関係や親友関係という観点からすれば、安定結婚問題が前提する諸条件は倫理的に中途半端であり、人間と人間との間の人格的な交わりを理論化したり制度設計するものではなく、原理的には一定程度あるいは全面的に商品化可能なサービスや財の取引において別払いに倫理的制約を課すことが可能な理論で、そのような制度設計が相応しい場合のみ適したものである。

二〇一三年

この年のノーベル経済学賞は、ユージン・ファーマ（アメリカ合衆国）、ラース・ハンセン（アメリカ合衆国）とロバート・シラー（アメリカ合衆国）の三人に、「彼らの資産価格の実証分析にちなんで」⁷⁾与えられた。

来たる数日間や数週間に及んで株や債権の価格を予測する方法はない。しかし、来たる三年間や五年間など、より長期間にわたってこれらの価格のおおまかな径路を予想することはかなり可能である。このような発見は、驚くべきことで矛盾しているように思われるかもしれないが、本年の受賞者であるユージン・ファーマ、ラース・ハンセンとロバート・シラーによつて成し遂げられ、分析された。

一九六〇年代はじめにユージン・ファーマと数人の同僚たちは株価の短期予測は非常に困難であり、新しい情報が株価に非常に速く反映されることを証明した。これらの発見はそれにつづく研究に深い影響を与えただけでなく、市場実践をも変化させた。世界中の株式市場で見られる、いわゆるインデックスファンドの出現は、その著名な例である。

数日間や数週間に及ぶ価格の予測がほとんど不可能ならば、数年間に及ぶ予見はさらに困難であるはずではなからうか？ その答えは否であるということをも、ロバート・シラーは一九八〇年代はじめに発見した。株価は会社の配当よりも大きく変動し、株価の配当に対する比率は株価が高いと下落し、それが低いと上昇することを発見した。このパターンは株だけではなく債権や他の資産においても成り立つ。

あるアプローチはこの発見を合理的な投資家による価格の不確実性に対する反応という観点から解釈する。高い将来収益は常ならぬ危険な時期における危険資産保有に対する補償であるというわけだ。ラース・ピーター・ハンセンは資産価格の合理的な諸理論を検証するのにとりわけよく適した統計的手法を発展させた。この方法を使つて、ハンセンや他の研究者たちはこの諸理論の改良が資産価格の説明に向かう長い道のりを進んでいる「なかなか目的に到達できない」⁸⁾ことを見出した。

もう一つのアプローチは投資家の合理的行動からの乖離に焦点を当てる。いわゆる行動金融論は抜け目のない投資家が市場におけるいかなる誤った価格設定に對しても売買することを妨げるような借入限度のごと

き制度的制約を考慮に入れる。

受賞者たちは資産価格に関する今日の理解の基礎を築いた。それは一部分は危険と危険に対する態度の變動に拠っており、一部分は行動的な基盤と市場の摩擦とに拠っている。(同)

株価をはじめとする資産価格の形成に群集心理が関与することを、ケインズは有名な美人投票の喩えによって示した。すなわち、最も多くの人が第一の美人だと投票して優勝した候補者に投票していた人が金銭的利得や心理的満足などの利益を得るような投票において、そのような利益を求める投票者は自分が一番美人だと思っている候補者ではなく、候補者のうちの誰が一番多くの票を得るかを推測してその候補者に投票するので、優勝者が実際に美人だと最も多数の人が判断していたとは限らないことになる。⁽⁹⁾

二〇〇九年のAKB48第一回選抜総選挙のころ、実際の人気においては大島優子が前田敦子を上回っていたと思われるが、グループ全体の人気が急上昇し、新参のファンが続々増えるという時期あたっており、総選挙投票券を封入したシングルCD『涙サプライズ』は、歌詞もミュージックビデオも総選挙開票直後の前田の誕生日を祝うという内容であり、ダンスのポジションもジャケット・イラストも

前田がセンターにいたように、投票券に前田の宣伝が大々的に付されていたため、事情をよく知らないAKB新参ファンの大多数は前田がAKBのなかでは圧倒的な人気を誇っていると信じ切って自分も前田を推すようになり、投票したと思われ、開票結果は前田が一位、大島が二位だった。⁽¹⁰⁾このようにAKB48第一回選抜総選挙のトップ争いはケインズの描いた人気投票の好例と思われる。

ある企業の株が上昇を始めると、この企業の株を当面持つていけばもうかると多くの人が思うようになって需要が増し、資産価格をさらに押し上げるといふ、美人投票的なメカニズムが働きがちであり、実際にその企業が将来にわたって高い利潤を上げて多額の配当を株主に与えると株の各需要者が予想しているかどうかという、美人投票において実際に美人だと各投票者が判断しているかどうかに対応する側面は等閑視されがちであり、資産バブルが起る。資産選択行動において美人投票的なメカニズムが働くと、各資産の将来収益に対して各人に与えられた情報に基づく合理的な予測をもとに資産を保有するという合理的選択とは乖離した行動がみられることになる。

ケインズの美人投票をはじめとして、経済学やそれに隣接する学においては、効用最大化や利潤最大化という従来の主流派経済学が疑うべからざる命題、すなわち

ハードコア¹¹⁾として絶対視してきた合理的行動仮説を批判する業績がしだいに蓄積されてきた。人工知能の先駆者として一九七五年にチューリング賞を受賞していたハーバート・サイモンは組織論において限定合理性を提唱して、一九七八年に「経済組織における意思決定過程に分け入る先駆的研究」¹²⁾によってノーベル経済学賞 (Alfred Nobel Memorial Prize in Economic Sciences) を受賞し、二〇〇二年にはダニエル・カーネマンが「心理学的研究に由来する洞察を、不確実性のもとでの人間の判断や意思決定に関する経済学のなかに統合したことにより」¹³⁾、また、ヴェルノン・L・スミスが「実験室における実験を実証的経済分析、とりわけオールタナティブな諸市場メカニズムの研究の手法として確立したことにより」(同)ノーベル経済学賞 (the Bank of Sweden Prize in Economic Sciences in Memory of Alfred Nobel) を共同受賞した。行動主義心理学の発想や知見、実験を伴う実証の手法が経済学においてもしだいに有力になってノーベル賞受賞者を出すようになり、今日ではノーベル経済学賞をほぼ独占しているアメリカの主流派経済学の一部として揺るぎない地位を行動経済学や実験経済学が占めるようになった。

著者が大学や大学院で経済学を学んだ一九七七～八六年ころは、合理的期待形成仮説によるマクロ経済学の全

盛期にあたり、自己の利益を最大化するホモ・エコノミクスという合理的行動仮説をハードコアとしないものは主流派経済学¹⁴⁾ではないという風潮が支配的であり、平山「一九八四」でそれに対する批判を展開した。合理的行動仮説への批判が許容されるようになるという主流派経済学の潮流の変化は、ポスト冷戦時代 (日本では平成時代とほぼ重なる) における人文社会科学の変化のなかでも第一に挙げるべきものではないかと著者は感じている。

マルクス経済学は、人間の歴史は合理的な法則性に從って予測でき、合理的に経済社会を造り替えることができると考えていた点で極度に合理的であり、ルーカスは、そのような極度の合理性を個々人が持てばマクロ経済政策は無効になると結論づけた。ルーカス自身マルクス主義の影響を強く受けて歴史学を専攻し、学士位をとった上で下部構造を究明する経済学に転じているように、マルクス経済学とルーカスらの合理的期待マクロ経済学は一見正反対のようだが、極端な合理主義者として同類に括することもできる。そもそも新古典派経済学の精華とされてきた一般均衡理論を樹立したワルラスも社会主義者であり、計画経済論争においてオスカー・ランゲらは一般均衡理論によって社会主義計画経済は実行可能であると論じて、一般均衡理論の非現実性を批判するミーゼスやハイエクらオーストリア

学派と対立してきた。⁽¹⁶⁾

米ソ冷戦はいずれの経済体制がより合理的であるかを巡って競い合ってきたが、昭和最後の年（一月七日まで）でもある一九八九年のベルリンの壁崩壊に端を発し、怒濤のように東欧社会主義圏を襲って一九九一年末のソ連崩壊に至る社会主義の凋落とともに、マルクス主義を設計主義的合理主義として批判しつづけたフリードリヒ・フォン・ハイエク⁽¹⁷⁾の反合理主義が評価を高め、それまではハイエクと同類の新自由主義的市場経済擁護論とみられがちだったフリードマンらのマネタリズムやルーカスらの合理的期待形成仮説によるマクロ経済分析もマルクス主義と一つ穴の貉とみられがちになり、一般均衡理論やマクロ経済の合理的期待形成モデルも説得力を失っていったのではないかと思われる。

社会主義の改革をめざしたさまざまな試行錯誤を経て、社会主義経済の欠陥は生産手段の私有を廃止したことによる資本市場の欠如に由来し、株式市場の創設による資本主義の復活以外に活路がないことが次第に明らかになってきた⁽¹⁸⁾。他方、資本主義経済においては株式市場をはじめとする資産市場の価格決定を合理的に説明できないことを八〇年代という社会主義の終末期において明らかにしてきたのが、二〇一三年ノーベル賞の対象とされた諸研究である。

株式市場から非合理性を払拭できないにもかかわらず、株式市場なしでやってゆくこともできないということが、資本主義か社会主義かという体制選択問題の結論として示された時期に、現実の社会主義が雪崩を打って崩れ去り、その後の経済学は合理的なホモ・エコノミクスという従来の経済学を支配してきたハードコアの呪縛を脱ぎ捨てることになったという風に見ると、この年にノーベル賞を受けた諸研究は極めて大きな意義を有していることになる。

二〇一四年

この年のノーベル賞は、ジャン・ティロール（フランス）に、「市場の権力と規制に関する分析にちなんで」⁽¹⁹⁾与えられた。

ジャン・ティロールは私たちの時代の最も影響力ある経済学者の一人である。彼は多くの領域で重要な理論研究の貢献をしてきたが、なかんずく、少数の有力な企業からなる産業をいかに理解し、規制するかを明らかにした。

多くの産業は少数の大企業や単一の独占企業によって支配されている。規制なしに放置しておく、これ

らの市場は社会的に望ましくない結果をしばしば生み出す。すなわち、費用によって動機付けられたものよりも高い価格付けがされ、より生産的な企業の新規参入を阻止することで非生産的な企業が生き残りたりする。

一九八〇年代半ば以降、ジャン・ティローはこのような市場の失敗に関する研究に新しい命を吹きこんだ。市場を支配する力を持った企業に関する彼の分析は、次のような中心的な問題にも強く関わる統一的な理論を提供した。それは、合併またはカルテルを政府はいかに扱うべきか、独占をいかに規制すべきかという問題である。

ティロー以前、研究者や政策作成者はあらゆる産業のための一般的なルールを求めた。独占企業に対する上限価格や、競争者間の協調の禁止などを彼らは提唱し、他方で価値連鎖において異なった位置にある諸企業の協調は許容した。ティローは、これらのルールはある条件のもとではうまく働くかもしれないが、他の条件のもとでは有害無益であることを理論的に示した。上限価格は支配的な企業に費用削減の強い動機を与える可能性があり、それは社会にとってよいことだが、また過剰な利潤を許すかもしれない、それは社会

にとって悪いことだ。ある市場内における価格設定の協調は通例有害だが、パテント（特許）プールは全ての人の利益になりえる。企業の合併によって供給者は技術革新を達成するかもしれないが、競争を歪めもするかもしれない。

それゆえ、規制ないし競争に関する最善の政策は、個々の産業に特有の諸条件に注意深く適合させなければならぬ。一連の論文や著書でジャン・ティローはこのような政策を設計するための一般的な枠組を提起し、テレコミュニケーションからバンキングに至る多くの産業に適用した。これらの新しい洞察を利用して、政府は有力企業がより生産的になり、同時に競争者や消費者にとって有害とならないように、よりよく促すことができる。（同）

ティローの業績の価値は、従来理論的な研究が手薄だった産業組織論において、精緻な理論的分析を行った点にあるとされることが多い。理論的な研究は複雑で多様な現実から一定の抽象化を行うため、そこから得られた知見をもとに現実をとらえ、さらには現実を導入しようとする時、プロクルステスの寝台のように、有害無益な結果をもたらしかねない。産業組織論における旧来の理論にはその

ような問題があり、彼の業績はそれを是正し、個々の産業の個性的な特色をふまえた分析や政策提言のための理論を提示したと評することができるだろう。

多数の事例をもとに抽象的な一般化を志向する研究と、個別的具体的な現実をよりよくとらえようとする研究との対比は、新カント学派が価値と無関係な自然を法則定立的に認識する自然科学に対して、文化科学（現代風に言えば人文科学と社会科学の総称）を価値と関係づける個性記述的認識によって特色づけて以来、よく知られてきたものだが、自然科学に近いとされる行動主義以降の心理学や限界革命以降の経済学は、この二分法によっていずれかに分類することが難しい。

多少乱暴に概括すれば、カール・メンガーらオーストリア学派の経済学は、現実からの帰納を重視する歴史学派に對して、複雑な現実をとらえるには帰納（歴史学や統計学）だけでは不十分だとして抽象的な理論からの演繹の意義を強調し、有名な方法論争が起こったが、その影響を受けてマックス・ウェーバーは理念型を提示しており、大学で近代経済学を学んだ際に私は、近代経済学の理論は理念型的一种だと理解していた。

合理的経済人を前提し、最適化という数学的手法による理論を追求することによって、近代経済学は他の人文社会

科学とは異なつて自然科学により近いものと見られがちになり、それゆえ人文社会科学のなかで唯一、ノーベル賞の対象とされたと論じられることも多かった。他方、経済学のもう一つの主流だったマルクス経済学は科学的社会主義を標榜し、世界史の基本法則によつて資本主義から社会主義への移行の必然性を説いたのであり、近代経済学とマルクス経済学は自然科学を模範とするような科学としていずれが優れているかを競い合つて来たが、ソ連東欧社会主義の行き詰まりとともに、少なからぬ経済学者は科学主義から自由になった。ティローはそのような経済学者を代表する一人であり、「予測精度が低いという理由から、経済学は厳密な科学ではない」と述べ、予測の阻害要因として地震学や医学などと共通する、「データが不十分、あるいは現象の理解が不完全」ということのほかに、社会科学と人文科学に特有な要因として、人々の戦略選択が相互依存関係にある場合、データや現象の理解が完全でも外部の観察者にとつて『戦略的不確実性』が生じ、『予言の自己実現』や『複数均衡』はこの範疇の問題だと論じている。^{①)}

すでに見たように、ノーベル賞を受賞した業績の多くは、合理的経済人の前提をはずしてきたのであり、ティローも経済学と心理学の学際的研究に取り組んできたのみならず、一般向けの著書であるティロー「二〇一八」

において人間行動のさまざまなあり方を紹介したうえで、「私たちは、社会科学が徐々に再統合される現場に立ち会っている。再統合の歩みはのろいかもしれないが、必然だと言える。なぜなら、……文化人類学、法学、経済学、歴史学、哲学、心理学、政治学、社会学は、みな同じ人間、同じ集団、同じ社会を扱っているからだ。一九世紀の終わりまで、これらの学問は一つにまとまっていた。それを復活させるべきであり、多くの学問分野が他分野の知識や技術に対して開かれた姿勢で臨む必要がある」(同、一七六頁)と述べている。このように、テイローは自然科学とは異なる人文社会科学の独自性を正面から受け止めるべきだとし、さらに、経済学が自然科学を模範として他の人文社会科学から自立する以前の学問のあり方に立ち戻るべきことを説いている。

二〇一五年

この年のノーベル賞は、アンガス・デイトン(アメリカ合衆国、イギリス)に、「消費、貧困と福祉の分析にちなんで」⁽²⁴⁾与えられた。

福祉を増し、貧困を減らすことをうながす経済政策

を設計するには、私たちはまず個人の消費選択を理解しなければならぬ。他の誰よりもアンガス・デイトンはこの理解を高めた。詳細な個人の選択と集計された結果とを結びつけることによって、彼の研究はミクロ経済学、マクロ経済学と開発経済学の諸領域の變化を助けた。⁽²⁵⁾

貧困や格差の問題は、先進国と途上国の間だけでなく近年では先進国内部においても深刻化しており、二〇一三年にフランス語で出版されたピケティの著書は世界的なベストセラーになった。デイトンのノーベル賞受賞はピケティ・ブームに対するアメリカ中心の主流派経済学の反発であると評されることもあるが、彼自身は「要するに私は、格差を全面的に支持しているわけではないのです。ピケティ教授が提議している問題を違った視点で見ているだけで、相反する立場にはいません。」「私個人の意見ですが、米国人は欧州人より格差を容認する傾向にあると思います」⁽²⁶⁾と述べている。

国や地域によつて格差を容認する傾向に違いがあるということを、エマニュエル・トッドは家族制度の違いによつて説明しており、⁽²⁵⁾デイトンもそのような見方を支持しているように思われる。

二〇一六年

この年のノーベル賞はオリバー・ハート（アメリカ合衆国、イギリス）とベント・ホルムストローム（フィンランド）に、「契約理論への貢献にちなんで」⁽²⁷⁾与えられた。

ハートが提示した不完備契約の理論とは、将来起こりえることをすべて知った上で契約を結ぶことはできないという意味での情報の不完全性を取り込んだものである。経済学においては従来、起こりえる事象がすべて分かっている限り、それぞれの事象が起こる確率も予め分かっているようなリスクと、起こりえる事象はすべて分かっているが、確率は事前には分かっているような不確実性とを区別するフランク・ナイトの説がよく知られていたが、人間は起こりえる事象を全て認識したうえで確率について考えることはあまりなく、思いがけない、想定外の出来事に直面しながら生きている。不完備契約の理論はそういう現実的な世界における契約をとらえるものである。

契約とは二者間で合意されたルールであり、契約が不完備であるとは、契約を結んだ時点では想定していなかった出来事が起こった場合に何が契約違反であるかについて予め合意をしておくことはできないということだと言い換えることができるだろう。単純な例を挙げれば、Bさんは

Aさんに金一〇キログラムを借り、全てを一括返済するまでAさんからBさんにその利息を、来月は一万円、再来月は二万円、三ヶ月後は三万円、……、十ヶ月後は一〇万円、……という風に毎月支払うという契約があったとしよう。そこで、現在の私たちが普通に考えれば十一ヶ月後は一百万円支払うということが契約から導かれると考えがただが、両手の指の数までしか数を算えられない人々にとつて一一という数の観念はなく、一〇まで算えたらまた一から算え直すとするれば、一〇日後の次の日は一百万円支払うということになるかもしれないし、一〇より大きな数の必要を意識して一一という数の概念を生み出し、一百万円支払うかもしれない。

このような問題を一般化すれば、将来におけるルールの適用について誰もが納得する一義的な答えは必ずしも存在しないということであり、ワイトゲンシュタインの言語ゲーム論のそのような側面を強調したものに、クリプキの議論がある⁽²⁸⁾。ワイトゲンシュタインは家族的類似ということを言い、日常言語において言葉の意味を定義として厳密に定めることの不可能性を指摘したが、そのように曖昧さを含んだ日常言語を使って人々は行為し、契約を結び、ルールに従うのであるから、ルールや契約は不完備なものである。言語ゲームという人間の営みの実相に経済理論が

立ち帰る道を開いたものが、不完備契約の理論であると評することができるのではあるまいか。

二〇一七年

この年のノーベル経済学賞はリチャード・セイラー（アメリカ合衆国）に、「行動経済学への貢献にちなんで」⁽²⁰⁾与えられた。彼の主要な研究領域としては、限定合理性、社会的選好、自制心の欠如が上げられている⁽²¹⁾。

限定合理性に関わるセイラーの理論としては、消費者の意思決定は、まず家計費、娯楽費や資産形成などいくつかの勘定項目に分け、個々の勘定項目ごとに別個にやりくりするものだとする、心理的アカウントリングがある。一九七九年、私は大学三年生のとき、全ての財・サービスについて効用関数を最大化するというのは現実的でないと思っ
てそれと代わるものとしてこのようなアイデアを思いついて、村上泰亮教授の演習で報告し、同人誌に論文を書いた。これが私にとって処女論文であるが、それを発展させず放置しているうちにセイラーの論文⁽²²⁾が公刊され、転居を繰り返すうちに私の処女論文は行方不明になってしまった。そういう経緯があるので、セイラーのノーベル賞受賞はある意味で自分のことのように思われた。

セイラーの受賞に対しては、行動経済学の台頭によって経済学者の大部分はグラントセオリーをめざすことから遠ざかり、実証研究や個別的な政策問題に焦点を合わせるようになったと指摘されており、私が大学院経済学研究科に進学してセイラーとは違った方向を選んだのは、彼のような方向に飽き足らないものを感じていたからだろう。

二〇一八年

この年のノーベル賞は「気候変動の長期マクロ経済分析への統合」⁽²³⁾にちなんでウィリアム・ノードハウス（アメリカ合衆国）に、また「技術革新の長期マクロ経済分析への統合」⁽²⁴⁾（同）にちなんでポール・ローマー（アメリカ合衆国）に与えられた⁽²⁵⁾。

行動経済学の影響が主にミクロ的な経済現象の実証や個別の政策課題への応用に傾きがちだという批判を意識したのか、この年のノーベル賞は地球環境や世界各国の経済成長の比較と結びついた長期マクロ経済分析に対して与えられた。

この種の大規模な問題は、実証や、誰もが認めるであろう価値判断を前提とした政策分析では片付かないものである。温暖化が将来世代に与える不利益を現在どのように評

価するかという時間選好率設定の問題や、ロシアのような寒冷地域は温暖化によって利益を受けるといふ問題があることを、マクロ経済分析は明らかにできるが、答えまでは与えてくれない。

民主主義は現在生きている人々が投票するので、近視眼的になりやすく、かといって将来世代の利益を高く評価するよう強制する世界政府のような権力が非民主的に形成されても、望ましい政策を本当に実現できるとも思えず、社会主義におけるレーニン、スターリン、毛沢東やポルポトのように、どこかに多大な犠牲を強い、地球全体にとっても温暖化以上のコストがかかることになりかねない。このことを意識して、ノードハウスは現実的な温暖化対策をめぐらしているように思われるが、現実的すぎて有効な対策を提起できないとの批判もある。

また、数理的な長期マクロ成長モデルに知識の進歩による技術革新を取り込むことでさまざまな興味深い結果が得られているが、経済発展に対する知識の重要性を唱えたハイエクは、社会に分散した現場の知識を有効に活用するために、集計データを使用するマクロ経済学による政策は有害だと早くから指摘しており、ハイエクを参照しながら知識と経済との関係を問い進めるならば、ローマー風のマクロ経済学による政策提言そのものの限界や弊害という問

題に突き当たるのではないかと思われる。

この年に示されたような長期的視野を伴うマクロ経済分析は、それだけでは明確な政策提言を導くことはできず、あえてそうしようとすれば、かつての社会主義の二の舞になりかねない。それによって示された問題を解決するには、狭義の経済問題にとどまらないさまざまな問題を顧慮した総合的な視野を伴う政治的な討議やリーダーシップが必要であろう。また、経済学がそのために貢献するには、テイロールが述べたような社会科学の再統合の道を進まなければならぬだろう。

- (1) ノーベル経済学賞の英訳名称には変遷があり、The Sveriges Riksbank Prize in Economic Sciences in Memory of Alfred Nobel は2006年以降使われなくなった (https://en.wikipedia.org/wiki/Nobel_Memorial_Prize_in_Economic_Sciences#Alternative_names、二〇一九年一月三日閲覧)。
- (2) <https://www.rnobelprize.org/prizes/economic-sciences/2012/press-release/>, 15 October 2012.
- (3) https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1387088793 のコメントナンバー、2012/5/1011:24:44.
- (4) M・ウェーバー、大塚久雄・生松敬三訳「一九七二」『宗教社会学論選』みすず書房、一四三頁。

- (5) I・カント、篠田英雄訳「一九七六」『道徳形而上学原論』岩波文庫、第二章四九段。
- (6) M・プーバー、植田重雄訳「一九七九」『我と汝・対話』岩波文庫、
- (7) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2013/press-release/>, 14 October 2013.
- (8) 引用文中の「」内は引用者による補足的説明である。
- (9) この美人投票ゲームは複数のナッシュ均衡のなから群集心理がどれかを選ぶようなりファイナメントとして定式化することができる(平山朝治「一九八四」『ホモ・エコノミクスの解体』啓明社、一七節、同「二〇〇九」『平山朝治著作集 第2巻 増補改訂 ホモ・エコノミクスの解体』中央経済社、I・一七節)
- (10) 平山朝治「二〇一九」『AKBレインボー経済』筑波大学経済学論集』第七一号、<http://doi.org/10.15063/00154855> (c) 一【ii】
- (11) I・ラカトシュ、A・マスグレーヴ編、森博監訳『批判と知識の成長』木鐸社、一九八五年。
- (12) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/1978/press-release/>, 16 October 1978°
- (13) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2002/press-release/>, 9 October 2002°
- (14) 合理的期待形成仮説による新しい古典派マクロ経済学の立役者ロバート・ルーカスは一九九五年に「合理的期待仮説を発展させて応用し、マクロ経済分析を形態変化させて経済政策への私たちの理解を深めたことにちなんで」(<https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/1995/press-release/>, 10 October 1995)、弱冠五八歳にしてノーベル経済学賞を受賞した。
- (15) マルクス経済学が一方の正統を占めていた当時においては近代経済学の主流と言うべきかもしれない。
- (16) 西部忠「一九九六」『市場像の系譜学——「経済計算論争」をめぐるヴィジジョン』東洋経済新報社。
- (17) フリードリヒ・フォン・ハイエクはグンナー・ミュンデルールとともに一九七四年、「貨幣と経済変動の理論における彼らの先駆的な業績と、経済的、社会的および制度的な諸現象の相互依存に関する彼らの透徹した分析にちなんで」(<https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/1974/press-release/>, 9 October 1974) ノーベル経済学賞を授与された。
- (18) 岩田昌征「一九九三」『現代社会主義 形成と崩壊の論理(旧社会主義体制論 第二版)』日本評論社。
- (19) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2014/press-release/>°
- (20) ジャン・ティロー、村井章子訳「二〇一八」『良き社会のための経済学』日本経済新聞社、一三三頁。
- (21) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2015/press-release/>°

- (22) デイトンの業績についての要約のプレスリリースからの翻訳引用は省略する。Alex Tabarrok, "Angus Deaton wins the Nobel" by Tyler Cowen, "Nobel Prize winner is Angus Deaton" (いずれも *Marginal Revolution*, October 12, 2015) の邦訳が以下にある。 <https://econ101.jp/アレックス・タバロック%EF%BC%8Fタイラー・ローエン/>。
- (23) トマ・ピケティ、山形浩生ほか訳『21世紀の資本』みず書房、二〇一四年。私は邦訳タイトルを『21世紀の資本論』だと誤解していたが、原タイトルは *Le Capital au XXI^e siècle* であり、マルクスの『資本論』のフランス語タイトル *Le Capital* をかまえているので、『21世紀の資本論』とすべきだろう。「論」が脱落したのは、マルクスを強く連想させるタイトルだと敬遠されて売上が落ちるといふ出版社の判断があったのだろうか？
- (24) 「ノーベル経済学賞を受賞したアングス・デイトンが断言！「格差のない世界を築くのは不可能です」」[COURRIER] <https://gmin2016.10.26>, <https://courier.jp/translation/65269/>。
- (25) エマニュエル・トッド、石崎晴己ほか訳「一九九二」新ヨーロッパ大全Ⅰ・Ⅱ』藤原書店。
- (26) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2016/press-release/>。
- (27) 日本語による一般向けの解説としては、野村明弘「ノーベル経済学賞『不備契約の理論』の意義―情報が不完全な中での
- ように契約を結ぶのか」『東洋経済ONLINE』2016/10/13 6:00, <https://toyokeizainet/articles/-/140152>がある。
- (28) フランク・H・ナイト、奥隅栄喜訳「一九五九」『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社。
- (29) ソール・A・クリプキ、黒崎宏訳「一九八三」『ワイトゲンシュタインのパラドックス―規則・私的言語・他人の心』産業図書、平山朝治「二〇〇九」『平山朝治著作集 第一巻 増補版 社会科学を超えて―超歴史的比較と総合の試み』中央経済社、二〇〇九年、「II-2 章 複雑性と言語ゲーム―社会科学のあたりまえパラダイム」。
- (30) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2018/press-release/>。
- (31) 日本語による一般向けの解説としては、野村明弘「ノーベル経済学賞、セイラー教授の受賞理由―『心理学』の要素を入れ、現実の政策にも影響」『東洋経済ONLINE』2017/10/10 6:40, <https://toyokeizainet/articles/-/192354>がある。
- (32) Richard Thaler [1985] "Mental Accounting and Consumer Choice," *Marketing Science*, Vol. 4, No. 3, <http://www.jstor.org/stable/183904>。
- (33) <https://www.economist.com/free-exchange/2017/10/11/richard-thalers-work-demonstrates-why-economics-is-hard>。
- (34) <https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2018/>

press-release/。

- (35) 日本語による一般向け解説としては、大沼あゆみ「ノーベル経済学賞教授のCO2削減案に批判もーノードハウス教授はより現実的な対策を支持」『東洋経済ONLINE』2018/10/17 8:00、<https://toyokeizainet/articles/-/243248>、宮川努「ノーベル賞ローマー教授はIT革命を予見したーローマーモデルとは『知識』が牽引する成長だ」『東洋経済ONLINE』2018/10/15 8:00、<https://toyokeizainet/articles/-/243077>がある。
- (36) フリードリヒ・A・ハイエク、嘉治元郎ほか訳「一九九〇」『ハイエク全集（第3巻）個人主義と経済秩序』春秋社。